

東日本大震災復興支援活動 及び 防災対策 特別講演会



NPOハート・オブ・ゴールド理事／志澤 公一

2011年12月14日カナダ・バンクーバーにて、「東日本大震災復興支援活動及び 防災対策特別講演会」がNGO日本警察消防スポーツ連盟カナダ支部主催、在バンクーバー日本国総領事館後援により盛大に開催された。NPO ハート・オブ・ゴールド代表理事／有森裕子、理事／志澤公一の2名が講師として招聘された。昨年3月11日に発生した東日本大震災後の支援活動内容と、現状の問題、今後の展望についてそれぞれ報告した。

講演は、バンクーバーに在籍する日系人と日系企業の方々、バンクーバー市民などを対象とした。



有森代表と志澤は、当該講演会を主催する日本警察消防スポーツ連盟の「特別顧問」と「事務局長」として職を兼務していることから、被災地での活動についてはハート・オブ・ゴールドの立場と、スポーツ連盟の立場、双方団体の特化した活動内容をそれぞれ伝えてきた。

講演会の最後には、今回2名のバンクーバー滞在にご協力・ご支援いただいた企業及び団体を代表してフジヤグループ代表平井様より、日系人と日系企業をはじめとする多くの市民から集められた募金を、今後の被災地支援に必要な活動資金としてお預かりした。

バンクーバー滞在中の全行程と併せ、以下のとおり、講演会について記録写真を添え紹介する。

バンクーバーでの活動概要

日時：2011年12月12日～2011年12月15日

場所：バンクーバー市内（在バンクーバー日本国総領事公邸、各日本語学校、協力施設、他）

【講演会】…2011年12月14日 18:00～21:00 日系ヘリテージセンター(バンクーバー市)にて

主催：日本警察消防スポーツ連盟カナダ支部

後援：在バンクーバー日本国総領事館

<2011年12月12日>

カナダ・バンクーバーに到着したその日の夜、毎年恒例で開催されている日加商工会議所主催のクリスマス・パーティが、ロイヤル・バンクーバー・ヨットハウスで開催され、ハート・オブ・ゴールド有森代表と志澤が招かれた。

このパーティーには、当該講演会開催に際して滞在期間の全てをバックアップしていただいた日系企業様、地元企業様、在バンクーバー日本国総領事、BC州多様文化担当大臣が出席する中で、リステルカナダ社副社長の上遠野和彦様から、「震災の復興には世界中から手が差し伸べられてきましたが、その道のりは遠く、末永い支援が必要です。継続的に被災地・被災者を支え続ける必要があります、その意味で今日ここに、ハート・オブ・ゴールド有森裕子様、日本警察消防スポーツ連盟志澤公一様、小川学様(カナダ支部長)を迎えられたことを光栄に思います」とのご紹介を頂いた。参加されていた多くのゲストにも、個々に継続的な被災地支援のお願いをする事ができた意義深いパーティーであった。



<2011年12月13日>

日系社会の子ども達が通うバンクーバー日本語学校を訪問。1906年、日本人移民者が建設した日本人会館を基に、増える移民者からのニーズに応じて創設された歴史ある建造物、学校である。

会場となった学校の最上階にある大教室で、有森代表の生い立ちを例に挙げ、子ども達に前向きに努力する事の大切さ、夢をつかむこと、そして人のために何が出来るかを授業形式で行った。

また、バンクーバー日本語学校と友好関係にある様々な日本語学校から、被災地の子ども達に宛てたクリスマス・カードが届けられ、応援メッセージの書かれたカナダ国旗などの贈呈式もあった。

これらは、帰国後直ぐに東松島市野蒜小学校に垂送。学校側と調整してクリスマス・イブに間に合う形で子ども達に届けられた。

被災地の子ども達は改めて遠い外国からも支援が続いている事と人の優しさを学んだに違いない。メッセンジャーとなった代表も感動していた。



被災地のお友達にX'masカードとエール・フラッグの贈呈式



最後にみんなで集合写真

日本国総領事公邸にて歓迎会

その後、在バンクーバー日本国総領事公邸にて歓迎会が行われた。伊藤秀樹総領事から紹介を受け、有森代表、志澤がそれぞれスピーチを行った。

震災1週間後に大阪で開催したマラソン大会の、参加ランナー用のTシャツをリターンしてもらい、そのTシャツを被災地に送った事が 3.11 支援の始まりであった事を紹介。続けて自ら被災地入りした際に立ち寄った避難所での様子や、仮設学校に通う子ども達の様子などから、まだまだ継続的な支援が必要であり、特に深く傷を負った子ども達の心のケアについては、力を入れて支援していかなければならないと伝えた。参加者からは熱心な質問などが寄せられた。



(左から)伊藤秀樹総領事、小川学スポーツ連盟カナダ支部長、山本ナオミ高等教育省大臣、有森代表、志澤理事。



スピーチする志澤



「3.11 子ども animo プロジェクト」について説明をして、アニモTシャツを教育大臣にプレゼント。



<2011年12月14日>

グラッドストーン日本語学校を訪問。この日本語学校はこの日の夜の講演会が行われる「ヘリテージセンター」内にある。ここでも子ども達を対象にミニ授業が行われた。子ども達や同伴された保護者からの質問も飛び交い楽しい時間を過ごし、3.11 東日本大震災で被害にあった子ども達宛てに X'mas カードを預かった。授業の最後には、有森代表の17日の誕生日を事前に調べていた子ども達から、サプライズでバースデー・ケーキがプレゼントされた。嬉しさの余り涙ぐむ代表の姿は子ども達と保護者の皆様にとって忘れられない思い出となった事であろう。



バンクーバー・メディア各社の合同記者会見

グラッドストーン日本語学校でのミニ授業が終了したあと、同じヘリテージセンター内でバンクーバーのメディア各社合同記者会見が行われた。

各社共に集中して聞かれた事は、発災当初の様子と現在の状況だ。特に現在大きな問題として被災地のボランティア受入態勢も変化し、ボランティアの激減が伝えられている中でどう行動すべきかについて焦点が当てられた。



有森代表からはハート・オブ・ゴールドとしては被災後の教育支援について、今まで実施してきた活動を個別に紹介。支援する側の基本的なスタンスとして本当に求められる形は、支援の押し付けにならない様に適切に調整を図る事が重要であり、その為にも被災地と密接にコミュニケーションをとる必要性を示した。ニーズの吸い上げとマッチングである。その上で更に、無理をせず自身のできる事を考える。私達は、スポーツを通して人を元気にする活動のノウハウをカンボジアの子ども達から学ばせてもらった。被災の状況や環境は全く異なるが、すべき事は同じであると答えた。

志澤からは、日本警察消防スポーツ連盟の特別救助復旧支援隊として、行方不明者の捜索活動の様子、避難所での人々の様子などが紹介された。その中でも世界中が驚き、報道された日本人の秩序ある行動について、“助け合い精神の民族性”について実際の具体例を挙げての話ではメディア各社も興味津々であった。

「東日本大震災復興支援活動及び防災対策」特別講演

日時：2011年12月14日 18:00～21:00

場所：カナダ バンクーバー/ 日系ヘリテージセンター

主催：日本警察消防スポーツ連盟カナダ支部

後援：在バンクーバー日本国総領事館

講演者：有森裕子(NPO ハート・オブ・ゴールド代表理事/日本警察消防スポーツ連盟特別顧問として)

志澤公一(日本警察消防スポーツ連盟事務局長/NPO ハート・オブ・ゴールド理事として)

有森代表は、ハート・オブ・ゴールドの発足から現在に至るまでの歴史、日本警察消防スポーツ連盟特別顧問としての関係を説明。カンボジアで培われてきた“スポーツを通して人を元気にする活動”のノウハウを活かした支援と、心に傷を受けた子ども達のメンタル・ケアの必要性、学校環境の現状について紹介した。

支援活動の基本は、それぞれ被災の度合いや被災の形、置かれている子ども達の環境状態に適した支援を適切に見つけ出して実行していかなければならず、今後も被災地と念密に調整した上での活動となる事を説明。これは被災の性格や質は異なるものの、カンボジアでの活動手法と全く同じである事も説明した。特に子どもの心の問題は深刻であり、重要な支援として計画的で且つ、継続的なものでなくてはならず、様々な形で多くの方々の後ろ盾が今後も必要である事を伝えた。聴講者に対し更なる支援のお願いとして熱弁をふるい、講演最後の大きな拍手からその期待を感じた。



志澤は、本職である消防官の視点から、被災地での活動全般と、同じ地域で被災した場合でも条件により大きな格差が発生した事象を具体的に紹介した上で、バンクーバーでの防災対策について話があった。当概講演会に先立ち、志澤は2ヶ月前に発生したバンクーバー島沖地震を調査し、地震発生時の対処に慣れている日本人と、慣れていないカナダ人の行動の違いについて触れ、過去活動した新潟中越地震と中越沖地震を比較してパーソナルベースでの準備の必要性と、多くの人命に影響する様な大災害が発生した場合に備え、ハード・ソフト両面の更なる対策の早期構築、そして3.11の継続的な支援の依頼をした。

【募金と被災地の子ども達宛てのクリスマス・カード贈呈式】



代表 平井様より



皆様の暖かい気持ちのこもった募金を預かる。
また、日本語学校の子ども達からは、3.11被災地の子ども達宛てにX'masカードを託された



ありがとうございます。またお会いしましょう。

<後記>

この講演会の後、参加者全員による記念撮影が行われて終了となる予定であったが、会場借用の時間も若干残っていた為、来場者から個別の質問を受け、今後の支援の形態について話をする事ができた。

そこで感じた事は、日本の国土から遠く離れた地に於いても、心から日本を愛し、被災地の方々を想っている人々が沢山いるという事。

震災被災地支援もそう、カンボジアの自立支援もそう、私達のでき得る事は本当に微力に過ぎない。しかし、遠く離れていても芯がブレていなければ、時間はかかるかもしれないが、大きな力となり、いつかは必ず再生・自立できるのだと確信できた。私たちは協同してやるべき事を地道にやって行く。只これだけだ。

「できる人が」・「できることを」・「できるかぎり」

私達は、このブレの無いスローガンを中心に置き、今後も行動する。